

はじめに

入江長八は幕末から明治に活躍した鍍絵作家である。もともとは左官職人であったが若いころ狩野派の絵師・喜多武清に学んだという伝承があるとおり、単なる左官職人だけで終わらず、新たな漆喰鍍絵という分野で様々な工夫を凝らした作品を残した。

その遺作は建築装飾、塗額という額装の漆喰鍍絵の作品、置物と呼ぶべき比較的小ぶりの塑像、工芸品、彫刻、絵画の分野に至るまで、その遺作は多様である。

私自身はこれまで長八作品について継続して調査し、その成果を「伊豆の長八」（静岡文化新書 11『伊豆の長八・駿河の鶴堂』安本収氏との共著、平成 24 年 12 月）としてまとめたことがある。しかしながら紙数の制約や新書という形態から詳しくは落款・印章の変遷については触れなれなかった。ここで、主要作品の落款と印章について整理することは長八作品のより深い理解に導く方策の一つであると考え、まとめておくこととした。

長八の印章の場合、捺された印章だけではなく鍍で書いた判も比較的多いことである。鍍絵の場合はその例が多い。ここで紹介する長八の落款すなわち自筆のサインと印章は 60 点ほどの作品を検討し、その主要な作品を紹介することとした。落款には多くの場合、年紀と月の異称を記入している。この落款の形式は生真面目と思われるほど徹底している。

1. 本名、雅号の変遷

①「入江長八」の落款印章

入江長八は今日、一般的に伊豆長八の名で親しまれている。これは結城素明著『伊豆長八』（昭和 13 年、芸艸堂。以下、『伊豆長八』で表記）の書名からである。この本の成立については復刻版（昭和 55 年、伊豆長八作品保存会）に詳しく触れられている通り日本画家・結城素明（1875—1957）の命を受けた紅型作家・鎌倉芳太郎（1898—1983）が調査し執筆したものである。長八が没したのが明治 22 年（1889）であり、『伊豆長八』の刊行が昭和 13 年（1938）であるので、長八没後およそ 50 年の時点における調査の成果である。そのことから長八に直接接した人物からの聞き書きもあり貴重な資料となっている。

実際の著者が鎌倉芳太郎であったとしても長八作品に結城素明自身が強く関心を持ったことが鎌倉氏

に調査を依頼したことにつながっている。さて、結城素明が長八作品を直接目にしたのは「昭和 9 年、三島神社（三島市・三嶋大社）に参拝したとき」であると記している（『伊豆長八』4 p）。

長八の生まれは伊豆松崎（現在の静岡県賀茂郡松崎町明地）である。今日、長八作品として残されている作品で最も若いころに制作された遺品は松崎の浄感寺の本堂天井絵『雲龍図』、欄間の漆喰鍍絵などである。『雲竜図』（図 1、浄感寺本堂天井絵）には書き判ではあるが朱文の「入江」と白文の「長八」（図 2）がある。また、弘化 3 年（1846）の浄感寺本堂棟札には「彩色 入江長八」（図 3）とあり、姓の入江と名前の長八を名乗っていたことが知られる。また、同じ棟札には「左官 中西伊之助 明地傳七」の名前も見え、長八の仕事が左官職とは一線を画していることが知られる。しかしながら、この時点では雅号というものは未だなく本名を名乗るのみであった。

また、浄感寺に所蔵され、天井絵と同時期に制作されたと考えられる『絹本着色正観上人像』（部分、図 4）は落款印章はない。正観上人は天井絵が制作される直前の弘化 2 年 6 月 21 日に遷化しており、この正観上人像は上人自身を親しく知っていた長八が生前の顔貌をよく知悉しており、その記憶に基づいて制作したものである。そうした点からみると正観上人像は長八の実在の人物表現をどのようにしてなされていったかについて考える貴重な作品といえよう。本名の落款に次いで「天祐」落款の時代になる。

②「天祐」の落款印章

今日、残されている長八作品の中で「塗額」では安政 3 年（1856）制作の『白に鶏図』（成田山新勝寺蔵）が最も早い作品である。この作品には、「圻者」（朱文）、「天祐」（白文）の二個の印章がある。これは確認してはいないが書判であろう。「圻者」すなわち左官という職業を明示し、「天祐」という雅号を入れている。「天祐」の雅号は東京目黒・祐天寺の住職から授けられたと言われているが、生涯にわたって使用している。松崎・浄泉寺十九世の祐興上人は祐天寺の十三世として転住した。この祐興上人が祐天寺の住職になった時期であるが、『伊豆長八』（p118）では嘉永 6 年頃（1853）としている。ここで注目しておきたい点は、書き判あるいは印章を使用する場合、基本的には朱文と白文を 1 個ずつ使用していることである。これは終生変わっていない。

塗額で「天祐」の落款は明治 8 年（1875）11 月制作の『湖上観月之図』（図 5、図 6、藤枝市教育委

員会蔵)に見られる。

(左下、墨書) 紀元二千五百三十五年 / 十一月 豆州圻者天祐。『圻者』(朱文)『天祐之章』(白文) これと似たような書き方の作品として置物の『神農像』(図7)の底面(図8)に

(朱書き) 紀元二千五百三十五年 / 第五月 圻者 / 天祐『天祐』(書き判)

両者とも書体もよく似ており、明治8年の11月と5月の制作であることが知られる。また、明治9年制作の「相生の松図」「龍図」も「天祐」落款である。ここで注意しておきたい点は印章に「乾道」を使用していることである。「天祐」と「乾道」は同時に使用していることが知られる。

漆喰塑像(置物)の作品では明治6年から9年制作の作品に「天祐」落款がある。『達磨大師像』(図9、明治6年7月作、山光荘蔵)の落款(図10)は

(底面、墨書) 癸酉首秋 / 豆州松崎住 / 圻者天祐謹摹

『神農像』(図7、明治8年5月、松崎・近藤家)の落款(図8)は

(底面、朱書き) 紀元二千五百三十五年 / 第五月 圻者 / 天祐『天祐』(書き判)

ここに見てきたとおり「天祐」落款は嘉永6年(1853)江戸・目黒の祐天寺住職祐興上人より受けてから明治9年(1876)ころまでの作品に使用していることが知られる。

③「乾道」落款印章

今日残されている作品では、文久2年(1862)正月制作の『秋江婦帆図』(図11)に(左下、墨書)

壬戌初春、圻者乾道山人寫、『乾道』(朱文)とある。ここで注意しておきたい点は既述したとおり「壬戌初春」と干支と月を入れている点である。この制作年月の記入については終生変わっていないことは注目される。長八作として伝承している作品について制作年月を入れていない作品については注意をする必要がある。

また、「乾道山人」の雅号はいつから使用始めたか不明であるが、比較的晩年に至るまで使用している。基本的には「天祐」「天祐山人」「乾道」「乾道山人」「天祐閑人」が長八の作品には落款として入れられている。このほか「天祐居士」の居士号は三島・龍澤寺住職星定老師から受けた居士号であり、明治11年以降に使用している。

「圻者」については終生使用されており、左官職人ということに大きな誇りを持っていたことの証左である。

さて、明治7年制作の『二十四孝図』(図12)には鋺先でひっかいたようにして文字を刻んだと思われる落款(図13)がある。鈴木洸氏による(注1)と「決め文字」とされているが、「甲戌仲陽寫、圻者乾道山人」の落款があり、『圻者』(朱文長円印)、『乾道』(白文長方印)の印が捺されている。この「決

め文字」の落款はこれまで確認されているものでは唯一の例と思われる。

明治9年制作の『天神(八幡神)像』には背面帯の部分に朱書きで

紀元二千五百三十五年 / 第六月温寫 / 圻者乾道とある。天神(八幡神)像、神農像いずれも神像ということで皇紀年号を入れたものであろう。

明治9年は松崎に滞在したと言われる通り、多数の作品を松崎に残した。明治9年、松崎に滞在中に制作した作品には次のようなものがあり、それらの落款印章は次のとおりである。

『近江のお兼図』(右下、墨書)

明九丙子季夏寫、圻者乾道閑人、『圻者』(朱文)『乾道』(白文) (裏面墨書) 神武天皇紀元二千五百參六年、明治九年丙子九月、日本圻者、伊豆長八作、稲葉壯造二十三

『森家の家族図』(図14、図15、右下、金泥)

明九丙子秋風月、圻者乾道山人寫、『圻者』(朱文)『乾道』(白文)

『相生の松図』(左端、墨書)

明九丙子季夏寫、圻者天祐、『圻者』(朱文)『乾道』(白文)

『龍図』(右下、墨書)

明九丙子暮秋寫、圻者天祐、『圻者』(朱文)『乾道』(白文)。

(裏面、別筆墨書) 神武天皇紀元二千五百卅六年 / 明治九子九月一日 / 第九大□十小□ / 伊豆國賀茂郡 / □□産 / 入江長八 / 六十二才 / 此仁東京府ニ於万國□□弘□□ / 人也生國松崎□□親墓參ニ帰國 / ス其時依頼スル也

『双象と童子図』(左下、白漆喰塗り書き)

明九丙子暮秋寫、圻者乾道山人、『圻者』(朱)、『乾道』(白)

『龍図』で興味深いことは別筆ではあるが「神武天皇紀元二千五百卅六年」とこれまた記されていることである。

これらに共通するところは「圻者」「天祐」「乾道」「乾道山人」などを適宜使用していることである。

④「天祐居士」落款印章

明治11年、龍澤寺の星定和尚から居士号を受けたことから「天祐」に代わり、それ以降は「天祐居士」を使用することとなった。

今日、「天祐居士」の落款を使用している作品の中で最も早い時期の作品は『天孫降臨図』(三島・龍澤寺蔵)である。

(右端、塗書き)

明治十一戌寅仲夏寫 / 圻者天祐居士『圻者』(朱文)『天祐之章』(白文)

ここにある通り明治11年5月の作である。長八は、明治10年、内国勸業博覧会に塗額、花瓶などを出品し、東京から三島の龍澤寺星定和尚の下に参禅していた山岡鉄舟と交流をはじめ頃である。

塗額の落款は「塗書き」といわれる技法で、書体は少し盛り上がりを見せ、自然に筆で書いたようになっている。おそらくは墨書し、その上から文字を鍔でなぞって書くことで盛り上がりが見えるようになっている。その辺の技法的な詳細はなお検討することが必要であると思われるが視認する限りではそのように見える。つまり、塗額においては単なる墨書の款記ではない。

自ら「翁」を入れた落款も晩年には使用している。三島・龍澤寺の不動尊制作の様子を描いた掛軸『不動明王像制作図』（図16）には、左下に墨書で「三島在於龍沢寺写之 / 六十六翁天祐居士『圻者』（朱文）『天祐之章』（白文）とある。明治13年、長八66歳の作である。

長八の落款で七十代の作品の書体は幾分弱ったものである。

2. 落款記入方式の変遷

すでに述べてきたとおり塗額、塑像、掛け軸など様々な作品を長八は残しており、落款の記入の仕方は必ずしも一定ではない。墨書、朱書、鍔先で切れ込みを入れた「決め出し」という方法、鍔先で漆喰を盛り上げ彩色する「置上」、これは漆喰を画面上において鍔先で形を整える方式といわれる（注2）。

①書

掛け軸の落款は墨書である。

『聖徳太子像』（図17、図18、右下、墨書）

明九丙子季冬 / 圻者天祐謹寫『天祐之章』（朱文）

ここに見られるように明治9年12月の作となっている。「天祐」落款で印章も「天祐之章」である。また、裏に浄感寺住職の「這上宮太子之図 奉開眼供養者也、維時明治九年、七月中浣日、浄感寺、第十五世釈隆観・・・・」とある。上宮太子は聖徳太子の事であるが、「季冬」は12月で浄感寺住職の墨書にある「七月中浣日」と異なる。裏面にある墨書は別紙を表装の折りにつけられたものと考えられる。この点については今後検討したい。

漆喰塑像の『宝来亀像』にも墨書がある。

『宝来亀像』（図19、図20、底面、墨書）

明九丙子桐秋 / 圻者天祐作之

桐秋は9月のことであり、明治9年9月の作である。ここに見る通り元号、干支、月が記入されている。

②決め文字と塗り書き

決め文字つまり鍔先で文字を彫ったような落款の書き方は1例だけである。明治7年2月制作の『二十四孝図』（図13）の鍔絵になされている。

（左下、決め文字）甲戌仲陽寫、圻者乾道山人
『圻者』（朱文）『乾道』（白文）

どうしてこの作品だけ決め文字の落款をしているか不明である。

このほかの墨書は塗額では終生にわたって使用されている。明治9年には墨書、金泥書、塗り書きなど様々で一定しているわけではない。明治9年に制作された塗額の落款を見てみると次のようになる。

『近江のお兼図』（右下、墨書） 明治9年6月

明九丙子季夏寫、圻者乾道閑人、『圻者』（朱文）

『乾道』（白文）

『相生の松図』（左端、墨書） 明治9年6月

明九丙子季夏寫、圻者天祐、『圻者』（朱文）『乾道』（白文）

『龍図』（右下、墨書） 明治9年7月

明九丙子暮秋寫、圻者天祐、『圻者』（朱文）『乾道』（白文）

『森家の家族図』（右下、金泥） 明治9年8月

明九丙子秋風月、圻者乾道山人寫、『圻者』（朱文）『乾道』（白文）

『双象と童子図』（左下、白漆喰塗り書き） 明治9年9月

明九丙子暮秋寫、圻者乾道山人、『圻者』（朱）、『乾道』（白）

『森家の家族図』はおそらくは森家の何らかのお祝いの記念的な家族の肖像画であり、そのお祝いを兼ねて金泥の落款をしたのであろう。9月の『双象と童子図』においては白漆喰の塗り書きとなっている。この時点において塗書きの技法を開発して使用することとなったのである。

この年以降の作品は基本的には落款は墨書でなされている。

建築装飾の作例として松城邸（沼津市戸田）はよく知られている。そこの2階バルコニー中央壁に嵌められている『雨中の虎図』には次の落款が塗り書きでなされている。

明九丙子雁来月 / 圻者乾道□人 / 『圻者』（朱文）、『乾道』（白文）

がある。雁来月は八月の異称であり、前述した塗り書き開始年月は平成九年八月頃とした方が正しいであろう。

塗り書きの落款は漆喰の乾き具合など手間の点で難しい所があり、墨書で間に合わせることも多かったであろう

おわりに

長八の落款と印章について整理すると次のようにまとめることができる。

①本名の入江長八、雅号の天祐、乾道、乾道閑人、乾道山人、天祐居士などを使用している。その使用時期は天祐の号を受けた時期を嘉永6年として、その頃から「天祐」の雅号を使用している。

②「天祐居士」の居士号は明治11年以降になり、乾道は終生にわたって使用している。明治11年以降は「天祐居士」の居士号を使用し、「天祐」の使

用は無かったと考えられる。

③款記には干支と月はこまめに記入しており、干支のみの記述は基本的にはしなかったと考えられる。

④落款が墨書あるいは塗り書きかは漆喰の乾き具合もあり、そのような漆喰の状態によるところが大きいと考えられる。しかしながら墨書でなく決め文字、塗り書きなどの技法の開発により墨書だけでは終わらなかった。

長八の落款をつぶさに見ることにより、作品から受ける印象だけでなく、極めて落款印章の使用が長八にとっては定まっていたことが知られる。これは狩野派の画家の下で修業したという伝承を落款印章の使用についても確認することができると言えよう。

おわりに、今回の整理が長八作品のすべてについて該当できるかどうかはまだ不明な点もあるが、これまで印象批評でしか過ぎなかった長八作品について少しは作品の整理ができたのではないかと考えられる。今後は画題や人物描写などをつぶさに見てゆくことが必要である。

注1、 鈴木洸「伊豆長八美術館と長八の生涯」(『日左連』2013.11～2014.5)

注2、 『重要文化財岩科学校校舎 修理報告書』(平成5年3月、静岡県松崎町、p74)

図版は筆者、田島整、田中之博氏撮影のものを使用した。



図1、雲龍図(浄感寺本堂天井絵)



図3、浄感寺本堂棟札



図2、雲龍図印章(浄感寺本堂天井絵)



図4、正観上人像(部分)(浄感寺蔵)



図5、湖上観月之図(藤枝市教育委員会蔵)



図8、神農像款記(個人蔵)



図6、湖上観月之図款記



図9、達磨大師像(山光荘蔵)



図7、神農像(個人蔵)

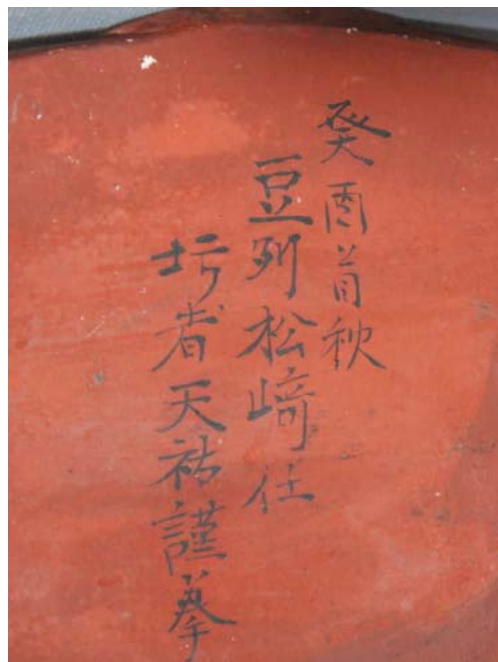


図10、達磨大師落款(山光荘蔵)



図11、秋江帰帆図(個人蔵)



図14、森家の家族図(個人蔵)



図12、二十四孝図(個人蔵)

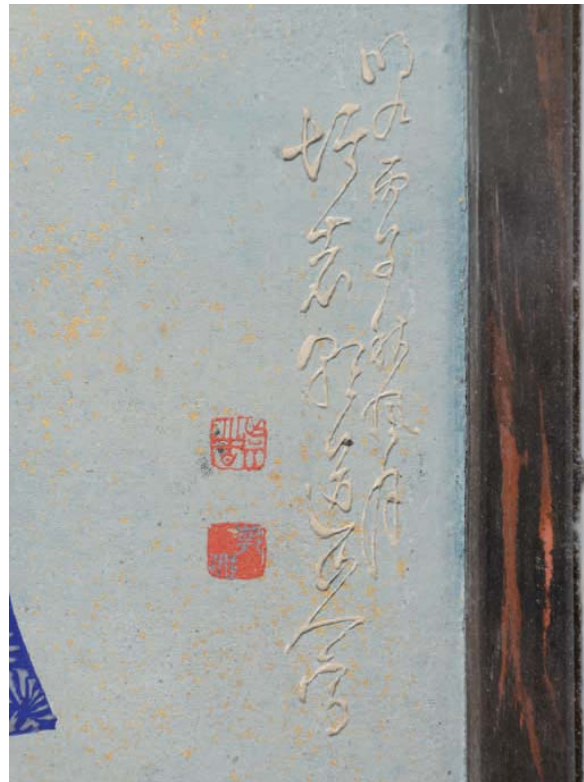


図15、森家の家族図落款印章(個人蔵)



図13、二十四孝図落款印章(個人蔵)



図16、不動明王像制作図(部分)(個人蔵)



図17、聖徳太子像(長八美術館蔵)



図19、宝来亀像(山光荘蔵)

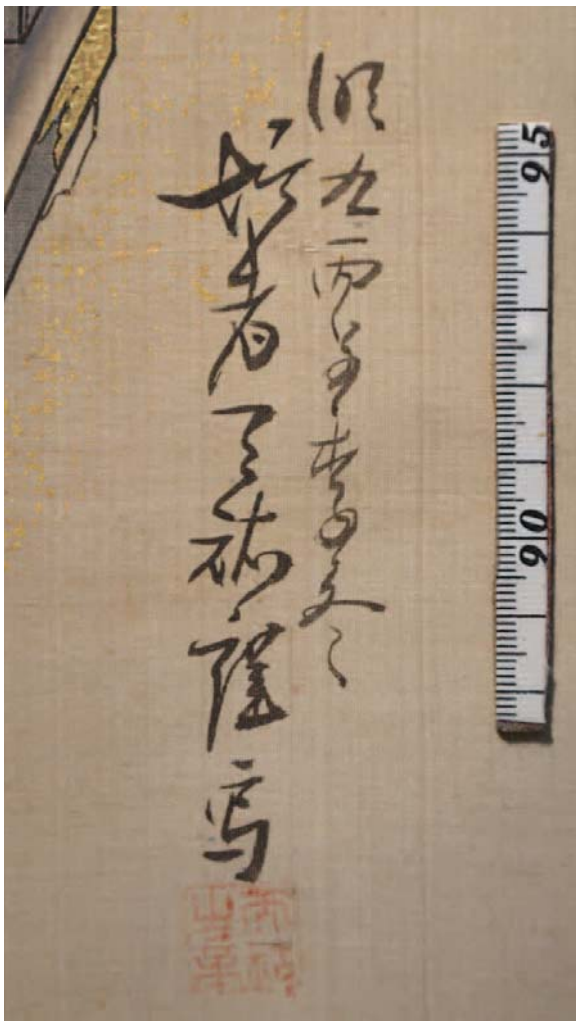


図18、聖徳太子像款記(長八美術館蔵)(原寸)

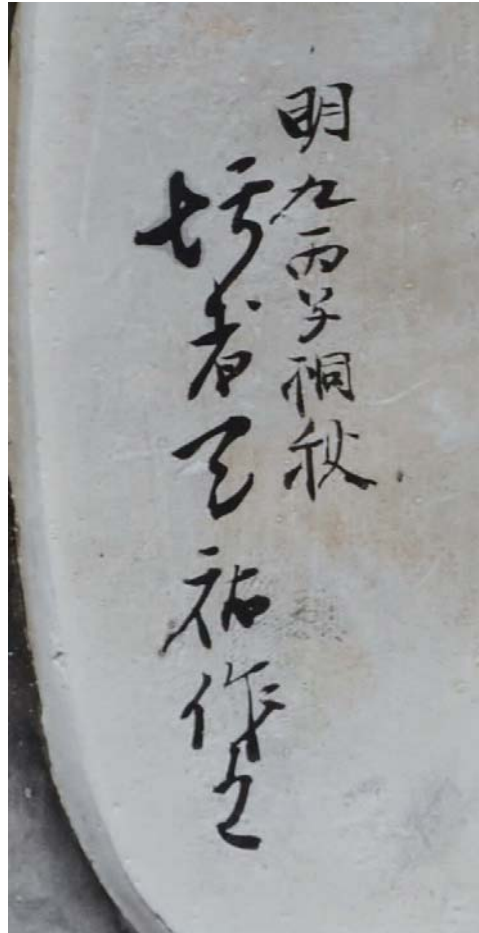


図20、宝来亀像款記(山光荘蔵)

入江長八略年表

西暦	元号	干支	年齢	一般事項	長八事項	雅号など	建築装飾	塗額	置物(像その他)	絵画	技法
1815	文化12	乙亥	1歳		8月5日、伊豆国松崎村明地、兵助、母おてこの長男(一説には三男)として誕生。						
			7歳		浄感寺塾に入る。						
1826	文政9	丙戌	12歳		このころ松崎の左官、関仁助の弟子となる。						
1833	天保4	癸巳	19歳		江戸に出る。日本橋の左官棟梁・波江野亀次郎に弟子入り。						
1836	7	丙申	22歳		こころ喜多武清(1776-1857)に画を学ぶ						
1840	11		26歳		新内節を修得し、旅芸人一座と巡業に出る。その後、江戸にもどり波江野の下で再び左官となる。						
1841	12	申丑	27歳	天保の改革始まる	東京・茅場町薬師堂向背柱装飾(龍の漆喰装飾)か(明治18年焼失)、名声を得る。「柳刃」鏝を考案。		4月吉日、江戸日本橋茅場町の薬師堂工事に従事か。				
1845	弘化2	甲辰	31歳		6月21日、松崎・浄感寺住職正観上人遷化、享年64歳						
1846	3	丙午	32歳			浄感寺本堂天井絵『水墨雲竜図』、書印「入江」「長八」。	このころ浄感寺本堂天井絵「水墨雲竜図」、襖絵「水墨龍図」、欄間「鏝絵飛天図」など制作。			正観上人画像	
1847	4	丁未	33歳		3月中旬、浄感寺本堂本尊遷仏供養。江戸・深川の妓楼、播磨屋源次郎の娘・たきと結婚。十代目播磨屋金兵衛を名乗る。						
1853	嘉永6	癸丑	39歳			江戸目黒祐天寺第13世・祐興上人(松崎・浄泉寺の人)より天祐の号を受ける。					
1856	安政3	丙辰	42歳	安政大地震(安政2~4)、松崎に大津波	成田山に参籠し漆喰不動明王像を修復すと伝える。	印「圀者」「天祐」(『鏝絵白に鶏図』成田山新勝寺)		4月2日、成田山新勝寺に『鏝絵白に鶏図』を奉納(天祐落款)	新勝寺の漆喰不動明王像を修理。		
1858	5	戊午	44歳		播磨屋の菩提寺、江戸上野正定寺鎮守堂本殿を建立寄付。						
1860	7、万延元年	庚申	46歳	正月、万延遣米使節派遣。桜田門外の変	江戸上野正定寺に漆喰白象を寄付			5月、江戸・正定寺に漆喰鏝絵白象像を奉納			
1862	文久2	壬戌	48歳			落款「圀者乾道山人」(『鏝絵秋江帰帆図』)					
1863	3	癸亥	49歳			別筆「左官長八郎作」(『圀者乾道山人塗』(『塑造白狐』))	橋戸稲荷神社(足立区千住橋戸)明治2年か?		塑造白狐		
1865	慶応1	乙丑	51歳		1月21日夜半、成田山新勝寺の不動明王が二童子を連れて霊夢に現れる。(『天祐居士造立不動尊之記』三島・龍澤寺)						
1866	2	丙寅	52歳								
1867	3	己巳	53歳				八橋家、橋戸稲荷神社				

1868	明治元 (慶応4)	戊辰	54歳	明治維新							
1870	明治3	庚午	56歳		2月、江戸上野正定寺鎮守堂に漆喰大黒天像を寄付。6月3日、妻たき女没す。播磨屋三代目上田助右衛門を名乗る。						
1872	5	壬申	58歳				寄木神社(品川区東品川)土蔵造りの本殿扉絵				
1873	6	癸酉	59歳	ウィーン万国博覧会		落款「巧者天祐謹摹」(『塑造達磨像』山光荘)			7月、達磨像(松崎町・山光荘)		黒檀風の台
1874	7	甲戌	60歳			落款「甲戌仲陽寫、巧者乾道山人」					
1875	8	乙亥	61歳		上田姓から再び入江姓を称す。		松城邸(沼津市戸田)、旧岩科村役場壁画制作(鏝絵)		5月、神農像(松崎町)		擬洋風建築、擬窓
1876	9	丙子	62歳	11月、工部美術学校開校	松崎に滞在。6月、江戸深川川住の落款(『東京深川八名川町』依田直吉像)	落款「巧者乾道閑人」(『鏝絵近江のお兼図』)	大田家(沼津市戸田)	森家の家族	関仁助像(松崎町)、神功皇后像、応神天皇と武内宿禰像(松崎町、伊那下神社)		擬大理石(扁額)
1877	10	丁丑	63歳	2月、西南戦争勃発。8月、内国勲業博覧会	8月、内国勲業博覧会に出品。11月20日、花紋賞牌、褒状を受ける。山岡鉄舟と交流。三島・龍澤寺参禅を勧められる。	落款「巧者乾道山人」(『鏝絵富嶽図』)		富嶽図、官女図	火鉢、水瓶		擬竹の額縁
1878	11	戊寅	64歳	パリ万国博覧会	冬、龍澤寺・星定老師に参禅。	三島・龍澤寺の星定和尚に参禅、天祐居士の号を受ける。	龍澤寺隠寮壁画(三島市)	水月観音図(清水、鉄舟寺)	不動明王二童子像(龍澤寺)を制作。恵比寿像、大黒天像		連の屏風(?)
1879	12	乙卯	65歳					5月、鏝絵「群鳥図」(龍澤寺不動堂)	星定和尚頂相(龍澤寺)		
1880	13	庚辰	66歳		伊豆松崎岩科に滞在。		岩科学校壁画、御宿・しんしま壁画。		夏頃、春城院の諸仏。恵比寿像、大黒天像(松崎、近藤家)		
1881	14	申巳	67歳		深川八名川に住す(結城本 p)						
1882	15	壬午	68歳		11月24日、春城院に大般若経5巻の金円を送る						
1883	16	癸卯	69歳	1月、工部美術学校廃校						1月、十六善神画像(松崎・春城院)	
1885	18	乙酉	71歳		3月12日夜半、東京茅場町薬師堂焼失。長八、同堂の再建に奔走。				初夏、観音像制作		
1886	19	丙戌	72歳						山岡鉄舟の病氣平癒を願い、石造地藏菩薩像を制作。(東京上野・全生庵)		
1887	20	丁亥	73歳					寒牡丹図(山光荘)			
1888	21	戊子	74歳	7月、山岡鉄舟死去		落款「七十四天祐居士」(塑像禅鼎和尚像像底)			7月、禅鼎和尚像(松崎・春城院)		
1889	22	乙丑	75歳	2月、東京美術学校開校	10月8日、東京深川八名川で没する。	落款「仰誉天祐乾道禪士」(『自画像』)	松本邸(松崎)壁画「瀟湘八景図」		4月、門人・石井巳之助のために自画像を送る		